

## 大和平野中央スーパーシティ構想 (第4回検討会まとめ)

テーマ：知的な大和平野の創造

日時：2022年3月23日

場所：奈良県コンベンションセンター

講師：奈良県立大学学長 浅田尚紀氏、奈良先端科学技術大学院大学学長 塩崎一裕氏  
AZCA Inc. 代表取締役社長 石井正純氏（オンライン参加）

慶應義塾大学名誉教授 矢作恒雄氏

主な出席者：奈良県荒井知事、川西町小澤町長、三宅町森田町長、田原本町森町長、奈良県立医科大学細井学長、スタンフォード大学循環器科池野主任研究員（オンライン参加）など

### 内容：

第4回検討会は、奈良県立大学浅田学長が『『知的な大和平野』に向けて』とのテーマで講演し、県立大学の現状（地域創造学部地域創造学科の文系単科大学）と新学部の構想を説明した。この中で、新学部について2025年に船橋キャンパスへの先行設置を目指す方針が改めて示された。浅田学長は、新学部の構想として「人工知能」と「データ科学」を融合させた「DX（デジタルトランスフォーメーション）の社会を先導する人材をつくりたい」とし、現在のキャンパスにまず新学部を開設し、三宅町に新たなキャンパスを整備して移転する方向性を説明した。「言語教育に力を入れ、コミュニケーションを図れる人材を育成していく」としている。

次に塩崎奈良先端科学技術大学院大学学長が「奈良先端大の取り組み紹介」と題し講演。同大学の特徴として、研究業績数は、教員1人当たりに換算すると、86の国立大学の中で東京大学に次いで2位にランクされていると説明した。教育研究、キャンパス環境、社会共創、大学の経営、運営についての四つのビジョンをもとにそれぞれ四つの目標、合計16の目標を立てているが、主な目標として、①新たな課題解決型融合研究分野の共創、②社会的課題の解決に向けた産学連携とイノベーションの創出を目指した具体的な事例として、デジタルグリーンイノベーションセンターの設置を挙げた。同センターでは、バイオテクノロジー、情報科学、デバイス技術の新たな学際融合分野を創造して、いわゆるバイオエコノミーと呼ばれる理念で産学連携を目指すとともに、この分野での人材育成を推進していると

説明した。

次に、アメリカ・カルフォルニア州シリコンバレーのコンサルタント会社「AZCA Inc.」石井正純代表取締役社長が「シリコンバレーの発展とスタンフォード大学の役割」と題して講演した。石井氏は、サンフランシスコからサンノゼまで80キロぐらいの地域に、ヒューレット・パカード、アップル、テスラ、グーグル、ヤフー、インテル、eBayなど世界を代表する企業が軒を連ねるメカニズムを説明。スタンフォード大学という優れた大学に世界中から人が集まり、ただ研究だけでなく、イノベーションを起こそうとするベンチャーキャピタルなどの事業家などが豊富にいて、イノベーション・エコシステムが出来上がっている状況も明らかになった。石井氏は、シリコンバレーが成功した要因として、①世界中の誰でも受け入れるオープンネス②失敗に対して寛容というカルチャーの二つを挙げ、「全体の95%のスタートアップ企業は失敗するが、その経験を生かし、またリベンジできる環境を整えることも重要」と説明した。

そして、監修者でもあり「奈良県立大学工学系新学部のあり方検討委員会」座長を務める慶應義塾大学矢作名誉教授が、新学部の哲学、ポリシーを自身の経験をもとに分かりやすく説明した。矢作氏は「社会に出て使える『学問』でないと意味がない。そこで、県立大学理工系学部の授業は脳トレをやるような感覚でActive Learning方式による、『思考力』を強化する場とする」ことを発表した。このやり方を押し出している大学は日本にはなく「おそらく、競合せずオンリーワンになるだろう」（矢作氏）。

討論では、これまでの講演を受けて、監修者のスタンフォード大学循環器科池野主任研究員が「日本では、与えられた問題を時間以内に正確に大量に解く技術を磨く教育をずっとしているが、アメリカの教育はみずから問題を探し出して、それに対する仮説、課題を設定して、そして説いていくという教育方法で、課題解決型ではなく課題発見型、これが社会のためになるという考え方と言える」と日米の教育の違いを解説した。細井県立医大学長も「県立医大でもActive Learning方式による教育を徐々にスタートさせている」と賛同。田原本町森町長、川西町小澤町長も大学の将来に向けて大きな期待を寄せた。

最後に、荒井知事は「非常にいい話が聞けたと思う。人材というのは、やはりリーダー人材育成にこだわればいいのかと再認識した。リーダーの能力は何かというと、考える能力と、コミュニケーションの能力を醸成することが必要だと実感した。課題発掘という大きなテーマを見つける能力を磨き、論理的な思考に感性を入れるようなことになるとよい。知的交流があると感受性が養われて、課題の発掘に繋がると思う」と総括した。